

『不来子先生—たたかわざる者 R・H・ブライズとH・ソロー』感想 Comments on *Noh: Blyth-Sensei* —R.H. Blyth & H. Thoreau—

平井 明余
HIRAI Haruyo

Abstract: Mr. Blyth said during lectures that "Infinity always resides in the finite", which Mr. Munakata heard while taking in attendance. Whenever I see Munakata's Noh play, I feel that intangible things are included in the tangible things that can be seen on the stage, and they are some kinds of moving powers. This time, the intangible in *Blyth-Sensei* was Munakata's desire for peace as well as Mr. Blyth's. Although Thoreau, Basho, and Blyth are deceased, they existed on the stage like cypresses still alive, I felt, transcending time and space.

Keywords: Mr. Blyth, infinity, intangible, peace, cypress 不来子先生、無限、無形、平和、檜

宗片邦義先生原作 創作能『不来子先生 たたかわざる者 R・H ブライズとヘンリー・ソロー』を鑑能しました。四月開催予定でしたがコロナによる延期で無事秋晴れのこの日に観ることができて良かったです。幽玄、雅な能の世界観の中に先生の平和への想いとブライズ先生の魂に触れる事ができました。虚無僧尺八の中村明一氏の尺八もとても深みがありました。

梟山伏（狂言）は愉快でしたし、不来子先生はじめ羽衣のシテをされた津村禮次郎先生の舞にも魅了されました。

平井明余 フェイスブック

四月の公演が社会的な状況で延期になりどうなるだろうかと心配していたが、今回無事開催される事になりホッと嬉しい気持ちで電車に乗り国立能楽堂へ向かった。

昨年三月に銀座シックス内の観世能楽堂にて『たたかわざる者』を鑑能し大変感動を覚えたので今回も友人を誘い一緒に共有してもらった。

行く前に芦津かおり著『股倉からみる「ハムレット」』の本にある「宗片邦義の『英語能ハムレット』一生死はもはや問題ではない」(p229～260)を拝読した。宗片先生は今までに多くのシェイクスピア能や英語能、その他の創作能を生み出されてきたわけであるが、前例のないものであるだけに様々な試行錯誤があったことを感じた。

その中でR・H・ブライズ氏が講義中に「無限はいつも有限の中にある」と宗片先生が当時講義を受けている中で聴いた言葉についても書かれているが、先生が創られた能を拝見するといつも舞台上で目に見える有形の中に無形のものが含まれていて、そこのある種の感動を与える力が宿っているのではないかと感じる。今回『不来子先生』でのそれ（無形のもの）は先生の

平和への想いと希求、そしてブライズ氏の魂であるように感じられた。

今回は虚無僧尺八奏者の中村明一氏の演奏が節々に入り、より深みが増していた。シテ津村禮次郎先生の熟練の謡や舞いにも魅了された。面や衣装は和のものなのにイギリス人ブライズ氏の存在を感じられるというのは不思議なものである。

同行した友人は今回初めての能公演だという。お誘いした者としてはどんな印象だったか一抹の不安を感じていたが、公演後「意味も分かったし、すごく綺麗で新鮮で面白かったです。」

「いい経験ができたし誘ってくれてありがとう！」と連絡をくれた。初めて観てもそうに感じるのだなあと思った。彼女はかつての茶友で共に茶道の稽古に研鑽したのであるが、公演を拝見しながら能と茶道の共通点も感じた。無駄のない舞台設定、動きや歩き方、衣装や楽器などの伝統工芸品（職人の技）やピンと張った中にも柔らかさのある空気感が茶室のそれと似たものがあるなど。客席に座っているだけでも何か心地よさがあった。限られた空間の中で演者（シテ、ツレ、ワキ、地謡や囃子方など）がそれなりの数がいても、スッキリして見えるのは何故だろうか…。

「人生に意味あるは。その苦闘が絶望的になるときのみ」という台詞が印象的でそれはどういう意味なのだろうかと心の中で反芻した。前半には学生の台詞に「シェイクスピアのセミナーにては。ユーモア無しには。この世は生くるに耐えずと。」「ハムレットもオセローも。マクベスもリア王さえも。悲劇は必然なり。真の愛にはユーモアあり」とある。一見、相反するような台詞であるが、絶望的になり悲壮感漂う時が人生にはあるし、そういう時こそ色々もがき学びがあると今となれば感じるし、だからこそ絶望的な時が人生に意味があると言えるのか…と私なりに解釈した。そしてそういう時こそユーモアが生き抜く上での处世術になるのだと。

そしてやはり悲劇、絶望から見出される意味というのはシェイクスピアの思想が盛り込まれていて元々英文学、シェイクスピアの研究者である宗片先生ならではの厳選された台詞なのだろうと感じる。最後に地謡が「人生に意味あるは。その苦闘が絶望的になるときのみと。絶望の中に光あり」と謡う。「絶望の中に光あり」という台詞は灯台のように煌めくものがある。

この能公演は観能している時のみならず不思議と後になってより深みと余韻を残していく。能舞台の檜は夏や冬に膨張したり縮んだりして調整が必要らしいがそれは伐採されても木が生きているという事だそう。それでシンプルかつ無機質な様でありながら生き生きと立体感を増しているのだろう。ソローや芭蕉、ブライズ氏は故人ではあるがこの檜のように舞台上で時空を超えて立体的に強く儚く存在していた。

素晴らしい感動を与えてくれた宗片先生はじめ演者の皆さん、携わってこられた方々に感謝の思いである。